American ROCK LYRIC LANDSCAPE

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第7回
〝レッド・ネック〟のもうひとつの意味とは…

Jackson Browne
'Red Neck Friend'

Jackson Browne
"For Everyman"
Asylum●SD5067［1973］
⇒Asylum/Elektra［EU］
◎8122789132

この曲のタイトルの〝レッド・ネック〟は、直訳すると赤い首。かつて、外で仕事して首が日焼けしているブルー・カラーの人たちを、そう呼んだ。もともとは南部の教育のない経済的に低い層の人たちを指していた。南北戦争が終わり、それまで奴隷だった黒人たちと同じ仕事をしなければいけなかった白人たちをそう呼ぶ人もいる。

でも最近は、もうそれだけではないようだ。教育があって、頭が固い保守的な人のことも指す。本当にインテリな人は自分の考えに間違いがあると気づいたら、意見を変えられる。しかし、自身の誤まりに気づきながらも頑としてその意見を変えない人のことも、レッド・ネックという。人種差別する人もレッド・ネックだ。どんなに金を持っていても、どんなに教育されている人でも、レッド・ネックはいる。自分の世界しか認めない人、意見や人種が違う人を認められない頭の固い人たちだ。

本誌を読む人たちはほとんどあのカウンター・カルチャー映画『イージー・ライダー』を見たことあるだろう。この映画にはレッド・ネックが出てくる。ジャック・ニコルソンを叩き殺してしまう人たちだ。その前に刑務所にいる警官たち、そして最後にトラックからデニス・ホッパーとピーター・フォンダを撃ってしまう人たちもそう。ジャックのキャラクターもレッド・ネックに近い。縁のない人間のことを知りたくもない人たちだ。アメリカの田舎では、知らない人間にはあまりフレンドリーではない。

でも俺は、そういう世界をこっそり見るのが好きだった。サンフランシスコだというのに、俺の家の近くにそんな人たちが集まるバーがあった。お客はほとんど白人。フィリピン人もなぜか一人いた。真ん前にあるバス停には黒人がいつも並んでいたが、バーは彼を寄せつけない。お客はおしゃれなサンフランシスコには興味もない。みんな近所で生まれ育った人たちだ。ブルー・カラーもいたが、大学を出ている人もいて、仲間意識が強い世界だった。100メートル行くとメキシコ人のバーがあるのに、そこへは一回も行っていない。目の前には黒人の教会だが、付き合いもない。俺は興味本位から、近所のそのバーへ行くようになった。最初は冷たかったが、俺は白人に見えるから、何年もかけて少しずつバーテンと仲良くなった。バーテンと友達になれば、客は皆友達。でもその頃はジャパン・バッシングの時代で、テレビで日本のことが取り上げられると、〝ファック・ユー・ジャップ!〟と皆が口を揃える。そんなある日、俺は日本人の友達を連れて行ったんだ。俺たちはカウンターに座った。すると客やバーテンの目が変わった。俺はビールを頼んだが、バーテンはいつものような無駄口はたたかず、ひと言も発しないでビールを出した。俺たちは日本語で話し、ひとしきり飲むと金を払って帰った。その後、俺がまた一人でその店に行くと、バーテンが俺に聞いてきた。'How come you speak Jap?'＝なぜおまえは日本語をしゃべれるんだ?。

俺は母が日本人だと説明した。その時、彼の頭の中はきっとすごく混乱したと思う。何にも言わずにずっと俺を見てた。かなり長い時間だったように感じたが、その後、彼は〝オーケイ〟とひと言いい、それからは普通の空気に戻っていった。後でわかったことだが、そのバーにはそれまで日本人が来たことがなかったらしい。

ある日、俺がまたそのバーに顔を出したときのこと、テレビのニュースに日本車が取り上げられた。すると、俺を知らない客が〝ファッキング・ジャップ!〟と言った。その次の瞬間のことは今でも忘れられない。バーテンと何人かの客が、その男に〝ヘイ、シャットアップ!〟と言ったんだ。仲間に俺がいるから、ジャップはもう仲間になったわけだ。知らない世界を恐れているが、きっと仲間意識は強いんだ。クリント・イーストウッドの映画『グラントリーノ』を思い出すよね。じゃ曲に入ろう。

Pretty little one, how has it all begun?
They're teaching you how to walk
But you're already on the run
Little one, What you gonna do?
Little one, Honey, it's all up to you

ジャクソン・ブラウンはかわいい女の子に話しかけている。'Pretty little one...'＝リトルと言っているけど、相手は子供じゃない。実家に住んでいるが、精神的には十分に大人だ。きっと高校生だろう。親とのことの相談に乗っているが、半ばナンパだ。よくあることだ。親は子供たちの気持ちをわかってくれない。親は歩き方を教えてるつもりだけど、子供はもう走っているんだ。君はどうするんだ? 'It's all up to you...'＝あなたが決めればいいんじゃない? もう大人だからと彼は言う。

Now your daddy's in the den
Shootin' up the evening news
Mama's with a friend,
Lately she's been so confused
Little one,Come on and take my hand
I may not have the answer
But I believe I got a plan

父親はデン（応接間）で夕刊のニュースをシュートアップ（麻薬を注射している）するといっているが、それは、麻薬中毒の人みたいに新聞に夢中な父親のことだ。母親は（自分の友達の奥さん同士で、家族の悩みを相談しあっている。家庭の中には子

●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。

©George Cockle / Record Collectors

供をわかってあげようとする余裕がない。ジャクソン・ブラウンは彼女の手を取って行こうとする。答えはないかもしれないけど、ちょっとプランがあるんだってね。

Honey you shake, I'll rattle
And we'll roll on down the line
And see if we can't get in touch
With a very close friend of mine
But let me clue you in,
It ain't like him, to argue or pretend
Honey let me introduce you
To my redneck friend

あなたがシェイクして、俺がラトルして線の上を転がってみよう。二人で踊りに行くようなニュアンスだ。'roll on down the line' はどこかに行こうという意味だ。俺の親友に連絡をとってみようか。彼のことを教えるよ。彼は争ったり、だましたりしない。レッド・ネック・フレンドを紹介させてくれ。だって彼は嘘をつかないから。

Well they've got a little list of
all those things
Of which they don't approve
They've got to keep their eyes on you
Or you might make your move
Little one, I really wish you would
Little one, I think the damage would
do you good

親には子供にやらせたくないことのリストがたくさんある。'a little list' とあるけど、このリストは小さいというのではなく、〝ある〟という意味だ。親は目を離してくれないんだよね。いつ独立するかわからないのに。時々はちょっと違う人に会ったほうがいいんじゃない？　色んなことを体験して傷つくと、人生のプラスになるよ。

Honey you shake, and I'll rattle
And we'll roll on down the line
We're going to forget all about
the battle
It's gonna feel so fine
'Cause he's the missing link,
The kitchen sink, Eleven on
a scale of ten
Honey let me introduce you
To my redneck friend

俺の友達に会ったら、親とのバトル（戦い）のことなんか忘れてしまうよ。本当に気持ちよくなるよ。だって彼はミッシング・リンクだと言っている。ミッシング・リンクとは抜けているチェーンのリンク。つながりのこと。よく人間の祖先は猿だといわれるが、人間と猿の間の動物をミッシング・リンクというんだ。そして、'kitchen sink' は台所の流し台だけど、もう一つの使い方は、'He brought everything but the kitchen sink!' ＝これは彼はいらないものをたくさん持ってきたという意味だ。そして、10までしかないスケールなのに彼は11と言っているのは、実際より大きい、すばらしいと伝えたいんだ。

Honey you shake, and I'll rattle
And we'll roll on down the line
I'm going to try to swing you up into
my saddle
And then we'll run but you'll think
we're flyin'
Now honey don't just stand there

Lookin' like this dream will
never end
Honey let me introduce you
To my redneck friend
I said honey let me introduce you
To my redneck friend

'I'm going to try...' 馬の鞍に乗り上がるというのは、乗せてあげるから挑戦してみな、という意味だ。そして俺たちは走るけど、君は飛んでいると思うよと。自分の世界ではない人に会い、新しいものを見たらどうだろう？　俺のレッド・ネック・フレンドを紹介させてくれ。新しい世界を見れば、新しい目線があるからくだらないことに悩まされなくなるんだってね。

この曲の説明は、これで終わり。でもこれには突拍子もない後日談がある。この曲の話を、アメリカ人の友達である元タワー・レコード・ジャパンの社長、キース・カフーンに話したら、笑いながらこう言われた。'That's not the whole story!' ＝それがストーリーのすべてじゃないよ！。どうやら「レッド・ネック・フレンド」はジャクソン・ブラウンの、ロックの歴史に対するのトリビュートらしい。ロックやブルースの曲には、昔から裏の意味があるのは知っているが、キースの話を聞いてみると、この曲も裏でセックスを語っているという。俺の赤い首、レッド・ネックは実は自分のペニスのことなんだ。男の友達 'My little friend' は、まさに正直者だ。セックスをしたいから、立ってしまう。ペニスは嘘をつかない、だましたりしない、争いもしない。確かにそうだ。ヴァースの中には 'missing link' という言葉が入っている。リンクはソーセージのこと。そのあと出てくる言葉は、'Eleven on a scale of ten' ＝男の人は自分のペニスのことをいつも大げさにいう。10しかないのに、11あるとね。そう思いながら読むと、すべてがセックス一色だ。俺の友達に紹介してあげるというのは、一緒に寝ようということ。そうしたら、親のことも何でも忘れられるよってね。

俺もまだまだロックの詞から学べることはあるな、というのが今回の実感だ。しかもあの、クリーンなイメージのジャクソン・ブラウンがこんなことを歌っていたなんて、少なからずショックだった。俺もまだ甘かったな。

RED NECK FRIEND by Jackson Browne ©Copyright by Swallow Turn Music
The rights for Japan licensed to Sony Music Publishing（Japan）Inc. 日本音楽著作権協会（出）許諾第1011602-001号